町村合併60周年 ロゴマーク&キャッチフレーズを投票で決定します！

額田郡幸田町と幡豆郡豊坂村が町村合併して、平成26年8月1日で60周年を迎えます。そこで、「町村合併60周年」を記念して行われるさまざまな事業を盛り上げるためのロゴマークとキャッチフレーズを町民の皆さんに投票してもらいます。

次の候補作品の中から、町民の皆さんの投票で最も得票が多かった作品をロゴマークとキャッチフレーズとして採用し、活用していきます。町村合併60周年に最もふさわしいと思われる作品を、それぞれ1点ずつ選んで投票してください。

問合せ　企画政策課広報広聴G（内線333）

ロゴマークのカラーバージョンは裏表紙に掲載しています。

町村合併60周年 ロゴマーク候補

1

2

3

【説明】
①ひと目で60周年が分かり、えこたんが元気よく還暦を祝うイメージ
②歩んできた60周年を背に、未来に向かって凧のように舞い上がるイメージ
③虹を過去から未来への架け橋と見たてて、元気よく明るい未来に飛躍するイメージ

町村合併60周年 キャッチフレーズ候補

1 豊かな幸せ これからもずぅ～っと♪

【説明】豊坂村の「豊」と幸田町の「幸」の一文字ずつを取り、それがずっとずっと発展しながら続くようにという思いを込めて。

2 ハッピー・ダイヤモンド幸田

【説明】結婚記念の60年目はダイヤモンド婚式とも言われるので、幸田町・豊坂村の合併60周年を「ダイヤモンド婚式」となぞり、幸田町の「幸」をハッピーとしました。これからも幸せで輝き続ける思いも込めて。

3 オンリーワンの住み心地

【説明】幸田町の良さは人、豊かな自然、歩みを止めない適度な発展にあると思います。その良さの全てを「住み心地」という表現にしてみました。気づけば周りは「市」ばかりですが、まさにオンリーワンの良さがこの町にはあると思っています。

☆投票できる人　幸田町に在住・在勤・在学している人　＊１人１回の投票
☆投票方法　キャッチフレーズとロゴマークの番号、氏名、住所、電話番号を記入して、投票。
(1)投票用紙　⇒投票箱設置場所の投票箱へ ＜投票箱設置場所＞役場１階総合受付、保健センター、中央公民館、町民会館、図書館、老人福祉センター、町民プール
(2)ハガキ　⇒〒444－0192　幸田町役場　企画部企画政策課　へ郵送（役場の住所記載不要）
(3)メール　⇒ホームページから企画政策課へ
(4)ＦＡＸ　⇒ＦＡＸ番号 63－5139へ
＊投票用紙は町ホームページでダウンロードしていただくか、役場３階企画政策課と投票箱設置場所に用意してあります。
☆投票締切　**平成25年12月20日(金)（ハガキは当日消印有効、メール・ＦＡＸは当日到着分）**
☆結果発表　投票により決定した作品を町ホームページでお知らせします。
（投票していただいた人の中から、抽選で20人に粗品の進呈を予定しています。）

炎を纏う

芦谷煙火保存会

三州幸田

芦谷区の手筒花火保存会。
東三河では盛んな手筒花火だが、
西三河の手筒花火は
数えるほどである。

保存会の起源は
昭和43年ごろとされ、
時間の経過とともに
消滅しかけては、
存続を願う人の働きで復活してきた。

まるで、大切な炎を絶やさぬように。

総勢わずか25人。

毎年、こうた夏まつりと、
芦谷区の弥栄神社の祭りで
半斤から三斤の手筒花火を揚げている。
この季節が近付くと
皆、血が騒ぐそうだ。

驚くべき点は、
この手筒が手作りであるということ。

まつりの準備は、
手筒に適した竹を切るところから始まる。
思いを込めて縄を巻きつけてゆく。

問合せ 企画政策課 広報広聴G（内線334）

芦谷煙火保存会の皆さん（女性も在籍、厄年の希望者を含む）。手に持っているものが1斤、手前に置いてあるものが3斤という大きさ

一巻きごとに木づちで隙間をつめる

仕上げの結びには熟練の技が光る

自作の縄巻き機を使う。縄巻き後は汗をかくほど力を使う作業が連日続く

節が黒く、まっすぐな竹を切り倒す

等間隔に切る作業も集中力を必要とする大切な工程である

長年の経験、感覚を頼りに

9月1日。区内の竹林で竹切りが行われた。じっくりと竹を吟味する。ポイントは、まっすぐ伸び、中の空洞の大きさが8センチ以上（見込み）であること。また、外から見て節の色が白いものは若すぎる（強度が足りない）竹であるため、節が黒くなっているもの、その中でも、樹齢5年～7年のものを経験を頼りに探し、切り倒す。

切った1本の竹からは2～3本の手筒しか作れないため、使わない部分は80㎝間隔にさらに切断し、竹炭にして無駄なく利用する。

思いを込めて1本1本 妥協なく

9月3日から約10日間をかけて3斤24本（保存会の会員のみ）2斤24本（保存会の会員のみ）1斤28本（厄年の希望者も含む）半斤33本（厄年の希望者も含む）の合計109本すべての竹に荒縄を巻きつける。

夜8時に公民館に集まり、すべての手筒に縄を巻きつけ、竹の節を抜き、さらに内部に丁寧にやすりがけを施す。この作業を毎晩、夜10時まで行う。

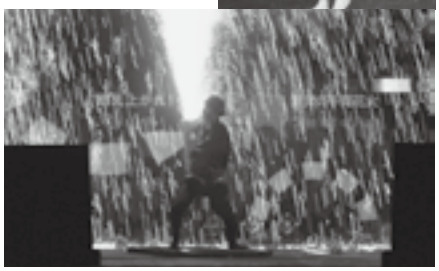
斤（きん）とは…この手筒花火の場合は1斤＝800gの火薬量を示す。

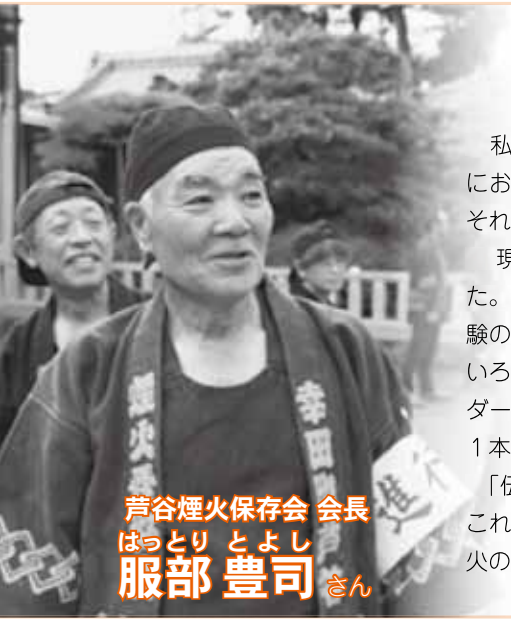
三州幸田 芦谷煙火保存会の歩み（保存会への聞き取りによる）

昭和41年	神社社務所の増改築があり、昭和42年に玉垣、由緒碑が完成。これに伴い、当時の青年団に花火の依頼が持ち上がる。
昭和43年、44年	奉納手筒花火を弥栄神社で揚げる。 ＊この奉納花火のメンバーのうち、４人が現在の保存会にも在籍している。
昭和54年４月	「しょうぶ会」を発足。 ＊しょうぶ会の発足後から現在に至るまで、手筒花火の奉納が行われている。 （当時は片手で持てるほどの大きさの手筒花火）ただし、芦谷コミュニティホームが神社敷地内に建設される２年間は手筒花火の奉納は休止。 ＊しょうぶ会のメンバーで今の保存会に在籍する人は多数。
平成７年	芦谷煙火愛好会として新たに発足
平成８年９月７日	こうた夏まつりで手筒花火を披露（以降毎年実施）
平成17年９月15日	愛知万博「炎の祭典」に参加。【そのほかに豊橋市、豊川市、田原市、新城市、蒲郡市、豊田市(松平)、小坂井町（現：豊川市）が参加】
平成20年	名称を芦谷煙火保存会（現在のもの）に変更

＊芦谷区の巫女舞は、昭和49年ごろから始まり、これも長い歴史をもつ。

（上・中）昭和50年代後半ごろの写真。当時はさらしに足袋という姿で手筒花火を揚げている。（下）平成17年の愛知万博「炎の祭典」で手筒花火を披露した。





芦谷煙火保存会 会長
はっとり とよし
服部 豊司 さん

安全を第一に考え、技術と思いを引き継いでいきたい

私が花火を始めたのは、30年ほど前だね。友人が「しょうぶ会」に入っとって、「一度見においでん」と誘ってくれたのがきっかけでした。初めて花火を持った時は熱くて熱くてそれは大変でしたが、やめたいとかそういう気持ちは全くありませんでしたね。

現在に至るまでに保存会の名称の変更や、手筒花火が途絶えてしまった時期もありました。それでも現在、25人の会員でこの手筒花火を守り続けています。会員の中にはまだ経験の浅い人から、30年を超えるベテランも在籍し、その中には大工・ひもを扱う業者などいろいろな職業の人がいるので、花火を作り上げる過程では、それぞれが詳しい分野でリーダーシップを発揮してくれるところがこの会の強みですね。みんなで力を合わせながら、１本１本に思いを込めて作っています。

「伝統」というものも、一度事故やケガがあっては台無しになってしまいます。ですから、これからも安全を第一に考え、ケガや事故が起きないことに神経を注ぎつつ、この奉納花火の伝統を絶やさないよう、若い世代に「技術」と「思い」を引き継いでいきたいね。

講習会では、経験年数にかかわらず全員が、姿勢、持ち方、腕や手首の角度、顔の向きなどを入念に確認する徹底ぶりである

最後に細部の仕上げを施し、完成

やすりがついた特殊な棒で節を抜いた後のでっぱりがなめらかになるまで削る

縄巻きは、手作りの縄巻き機を使う。これはもともと縄業者が使っていた縄巻き機を譲り受け、それを地元の自動車加工職人さんが手直しし、手筒に縄を巻く専用の機械に仕上げたものだ。1本あたり4～5人で作業を行い、ひと巻きするたびに、縄を力強く引っ張り、さらに木づちで何度も叩いて1ミリの隙間も作らず詰めていく。それを1本1本丁寧に行う。

できあがった手筒はベテランの会員がチェックし、少しでも歪みや緩い部分があれば、一から巻き直しをする。そして、細部を磨き、余分な糸くずを切り落とし、見栄え良く仕上げる。10日間をかけ、無事すべての手筒が完成した。

9月14日、手筒は豊橋の花火業者の元へ搬送された。火薬を詰め、祭り当日に神社へ届けられる。

子どもたちが持つちょうちんも1本1本丁寧に作られていた

安全であることが何よりも大切

祭り前日の9月21日、全員が公民館に集まり、本番を見込んだ講習会が開かれていた。「安全に事故なく終わって当然」ということの本当のむずかしさを、すべての会員で再度徹底して講習に挑む。毎年花火を上げている会員でさえも、約2時間、持ち方や角度などを確認する講習を受けた。

講習後、手筒花火を盛り上げる「子どもちょうちん」で使うちょうちん約60本すべてを、手作りで完成させた。「ここをこうした方が子どもたちも安全だな。」明日の光景を想像してか、会員たちの顔も少しほころぶ。

翌日、ついに本番を迎えた。

灼熱の太陽が少しだけやわらぎ
まだ青々とした木々を
さわやかな風が揺らして過ぎる
9月22日のこと

壮大な青空を背にした弥栄神社は
まるで本殿前の歌舞伎役者が
きりりと化粧を施したように
いつもに増して凛とたたずむ

秋風のいたずらとは少し違うざわめきが
あたり一面を包み込む

やがて日が沈み
暗がりは色を増し
胸は高鳴る

巫女は優雅に舞い、
法被姿の子どもたちが
ちょうちん行列をつくり囃し立てる

いくつもの穴があいた法被をまとう男衆が現れ、
その勇敢な立ち姿だけで作り上げる
一瞬の静けさ

さあ、火を　灯せ

花火を揚げる前に会長は言った。

底が抜ける「ハネ」の瞬間を見てくれと。

花火を持っているとき、
熱いのは当然だ。
それでも、どんなに熱くても、
みんなで作りあげたこの花火を
手放すことだけは絶対に許されない。
それだけ気合いも入れ、
細心の注意を払い、全力で挑む。

今でも火を付ける瞬間は、
初めて花火を持った時の
緊張感がよみがえってくるんだ、と。

その言葉どおり、火の粉を浴び、
耐える姿に歓声と拍手が沸き起こり、
ハネの轟音と風圧が観衆を引き寄せた。

神社にいつもの静寂が戻ると、
大役を終えた男衆たちが
ヤケドのあとを笑いながら見せてくれた。

私にはそれが、「勲章」にしか見えなかった。